子どもが療育に通うことによる保護者の認知の変化

縦断的調査による検討

○長岡千賀

(京都大学こころの未来研究センター)

キーワード：療育、保護者支援、時系列的变化

Cognitive Changes of Parents Who Have Children with Developmental Disorders

Chika NAGAOKA

(Kokoro Research Center, Kyoto Univ.)

Key Words: treatment and education, social support for parents, temporal changes

目 的

発達障害を持つ子どもを支援するにはまず家族を支援することからはじめなければならないという認識が広まりつつある(中田, 2002, 『子どもの障害をどう受容するか』). 療育場面における保護者へのフィードバックの時間は、保護者支援の入口になりうると考えられる. そこで本研究では、子どもが療育を継続して受けることによって、保護者による子どもの特徴把握や子どもの不適切な行動への対応などが変わるかどうかを調べるため、縦断的質問紙調査を行った. また療育者が実際にに行った支援の仕方についての内観報告も参考にし、より効果的な保護者支援の方法について探索的に検討する.

方 法

調査参加者 A大学の療育に通う子ども(2011年度で小学3~4年生)を持つ保護者で、子どもの保育を日常的にメインで行っている母親33名が質問紙に回答した. この療育(月1回)では、1セッションのうち最初の45分間は、療育者は子どもに、読み書きを中心とする学習支援ならびにソーシャルスキルトレーニングを施行し(保護者は別室)、残り15分間で療育者は保護者にフィードバックや相談等を行った. 本稿では表1に示す4群の結果を報告する.

表1 調査参加者(本稿での報告対象のみ)

群	子どもの学年(2011年度)・診断名	調査開始時期
①	3年・広汎性発達障害(PDD)	療育開始
②	4年・広汎性発達障害(PDD)	開始から約1年経過
③	3年・PDD+知的境界域	療育開始
④	4年・PDD+知的境界域	開始から約1年経過

事例数は①~④の順に、2, 3, 1, 4事例.

調査期間 2010年8月から2011年12月にかけて、約4ヶ月毎に、計4回、回答を求めた.

質問項目 子どもの学校生活の様子や、保護者の育児ストレス等を尋ねた. 例えば、「この3ヶ月の間、子どもの特徴を把握していた(以降、特徴把握)」、「この3ヶ月の間、子どもの不適切な行動に適切に対応できていた(以降、対応)」、「この3ヶ月の間、子どもの将来に不安を感じていた(以降、将来への不安)」といった項目に、保護者は4段階で評定した(「全くあてはまらない:1」~「よくあてはまる:4」).

療育者の内観報告 療育者に、各子どもや保護者との関わりの中でどのようなことを目指したり気をつけたりしていたかを自由に話してもらった.

結果 および 考察

図1に、①、②群の保護者の回答の一例を示す. この2事例は、子どもは読み書き自体に問題がな

いが作文が苦手であり支援が必要であるという点や、社会性に大きな支障があるわけではないという点などで共通した. 特徴把握に関しては、療育開始まもない①群のB児の保護者よりも、療育開始から約1年経過した②群のC児の保護者の方が、高く評価したときがあった. またC児はB児と異なり、保護者という際に不適切な行動をほとんど起こさなかった

(図1(b)のプロットがない箇所は不適切な行動が観察されなかったことを示す). 療育者の報告によると、B児の保護者との話し合いの中で療育者は、この保護者が子どもに対して多くの手助けをされていることを察し、これに対して、保護者がいなくても本人が気持ちや行動を調整できるようになることを目標にして、手助けの方法を変えていくことについて一緒に考えた. こうした話し合いを何度も繰り返すことにより、保護者は子どもの特徴把握を深めていく可能性が示唆される. ただし療育開始から約1年経過した②と④群の中でも特徴把握がより低く評価された事例がいくつもあった.

将来への不安に関しては、療育開始まもない①と③群内では共通して、徐々に不安が軽くなる傾向が認められた. 一方、②と④群では事例によって増減の傾向が異なった. たとえば、②群のC児の保護者は不安が増加した. これには、本児の学年が上がり勉強が難しくなるにつれ、本児の難しさに直面することが増えてきたこと(C児の保護者の報告)が関連すると推測される. このことから、療育開始まもなくは不安が軽減する期間があるものの、小学中学年で子どもの学習内容が難しくなるにつれ保護者の不安が増すことがあると言える.

また、①と③、②と④の比較から、子どもが知的境界域であることと不安の高さの関係、ならびに、配偶者との認識の不一致と不安の高さの関係が示唆された. これらの結果は、保護者支援のための重要な視点を示していると考えられる.

謝辞

調査実施に協力いただき、また有意義な議論をいただいた京都大学吉川左紀子先生、正高信男先生、国立障害者リハビリテーションセンター伊藤祐康氏、日本学術振興会村田(福島)美和氏、小川詩乃氏、昭和女子大学田村綾菜先生、ならびに鳥取大学井田美沙子氏に、深く感謝いたします. 本研究は京都大学こころの未来研究センターの「発達障害と読み書き支援」研究プロジェクトの助成を受けたものである.

図1 保護者による子どもの特徴把握等の時系列的変化